



Title	志賀直哉『大津順吉』における「私」の心理
Author(s)	モインウッディン, モハンマド
Citation	国際日本文学研究集会会議録. 2013, 36, p. 101-120
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/89297
rights	この作品はクリエイティブ・コモンズ 表示 - 非営利 - 改変禁止 3.0 非移植 ライセンスの下に提供されています。
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

志賀直哉『大津順吉』における「私」の心理

モインウッディン モハッマド
Moinuddin MOHAMMAD

志賀直哉『大津順吉』は大正元年8月に執筆され、同年9月に『中央公論』に発表された。また、大正6年に新潮社から出た「新進作家叢書『大津順吉』」の巻頭に収録されている。

本作品は、「第一」と「第二」に分かれており、それらはともに、主人公「私」が自分の過去を回想する形で書かれている。冒頭部で「淋しい想ひをした時代があつた」（第一、一）と、現在の時点から過去を振り返って語る「私」が、「明治四十年八月三十日」より「五六六年」以上前の「私」を描く形で作品は書かれている。その中には「今の私」や「其時の現在」などという表現が再三使用され、またハイフンや丸括弧の使用によって、過去（作品において過去の回想が始まる時点つまり明治40年より6年以上前の時期）の「私」と、現在（回想が始まる時点、つまり明治40年以降の時期）の「私」を区別できるようになっている。作品の最初の二節は主に「私」が「基督信徒だつた」時の出来事が語られている。第一の一は「私」が「未だ新米の信徒だつた」当時のもの、第一の二は、一より五六六年経ったあるクリスマスの晩の話である。キリスト教の教えが制限する異性との関係と女への欲求との間で引き裂かれる「私」の心理的な葛藤が、この時期の中心的な内容となっており、第一の三からは「或日」という言葉を使って日を追いながら話が進められている。ここでは、それまでと違って自由に異性と付き合うことができるようになった「私」の様子が描かれている。「第一」においては主人公大津順吉つまり「私」が関

わる「娘」（「K・W」、「絹」ともいう）、「第二」では「私」の家である大津家の若い「女中」である千代（Cともいう）が、「私」を惹き付ける主な人物となっている。

作品末に述べられている「巴里にある絵かきの友達への手紙」における「書き終わつて私は傍の懐中時計を見て、又、「明治四十年八月三十日午前三時半」と入れて、ペンを擱いた。」（第二、十三）の「明治四十年八月三十日」から計算していくと、第二の一の冒頭辺りの「或午後」は明治40年「初夏」に当たる。また、第二の三の「娘」に関する叙述の「前の年の秋見て以来、半年の間、私が頭に描いてゐた娘とは別人のやうに再び肥つて了つた」から考えると、第一の三冒頭の「或日」は明治39年の秋になるだろう。故に「第一」と「第二」の間は約半年の隔たりがあると推測でき、作中の作品「閑子と真三」を書いてからそれほど時間が経っていないと言える^②。

さて、『大津順吉』に対する評価としては、中村光夫氏の「非情（ママ）な自我崇拜」^③、須藤松雄氏の「自我貫徹の自画像が強烈に形成されている」^④作品、池内輝雄氏の「自己省察」^⑤という評価が、代表的なものとして知られている。また、『大津順吉』は志賀にとって「志賀文学初期の代表作」^⑥であり、志賀を作家として自立せしめた「記念碑的」^⑦作品であるとも言われている。

先行研究においては、主に「第一」と「第二」の〈断層〉・〈断絶〉の有無^⑧、草稿「第三篇」との比較や、「私」の千代や「娘」との関係の考察、「愛」と「性」の問題などという観点が見られる。多くの先行論では、作中で語られた「私」を完全に志賀の実体験に基づいたものとして読むか、部分的に志賀の実体験と重ね合わせて考察する傾向が見られる。^⑨『大津順吉』の内容を志賀直哉の身に起きた事実、つまり大津順吉イコール志賀直哉と捉えるかどうかについては、細江光氏が「名作鑑賞『大津順吉』——再評価のために——」^⑩において、『大津順吉』の内容のどれが事実でどれが虚構であるか既に詳しく検討している。それにもかかわらず、その論文においても、〈主人公大津順吉イコール作者志賀直哉〉という捉え方が所々に見られる。

別の言い方をすれば、従来の研究のほとんどは、作品論というよりも作家論であるという印象を与えるものと思われる。国松昭氏は「(注:本作品は)総合的志賀直哉論の一材料として扱われることはきわめて多いのであるが、対象を「大津順吉」そのものに絞った「大津順吉論」は意外に少ないのである」^⑫と述べているが、現在においても『大津順吉』が純粋に作品『大津順吉』として、つまり作家的な事実から独立した作品として論じられることは、一般に予想されるほど多くはないと言論者は考える。

いくつかの内容が作者の実生活と重なり合っていたとしても、作者イコール主人公と考えることは必然だろうか。作品を作品として純粋に分析するためには、作家的な事実から切り離して考察すべきではないだろうか。本稿では、論者はそのような立場を取ることにしたい。

さて、『大津順吉』の主題は、二人の女性と「私」との関わり方、またそれにより変貌する「私」の心理の動きにある。それぞれの女性との関係において他の登場人物が「私」にどのように影響しているかについて考えることは、「私」の心理を理解するために重要だと思う。そのために、「私」と他の登場人物との関係の変遷も追う必要がある。そこで、「私」が接近したキリスト教の理想を教える「U先生」と、女に対する欲求という現実から生まれたそれへの疑問、そして二人の女性との関わり方により変わっていく「私」の心理の動きに着目して、本作品の分析を行いたい。

第一節 「私」の理想への接近と離反

作中第一の二の「私」と第一の三以降の「私」について考えるために本節では、まず「U先生」への「私」の関心について、次にその関心を弱める理由になった「私」の女への欲求が持つ意味について、分析を試みたい。

一. 一 理想への接近——「U先生」への関心——

「私」は「十七の夏、信徒になつ」たとあるが、どういうきっかけでキリスト

ト信徒になったのか、その過程については何よりも「U先生」との繋がりによるところが大きいと思われる。「角筈のU先生」というクリスチヤンの教育者である人物の勉強会に参加したことなど以外は、キリスト教に関する事物への言及は一切見られない。

尤もこの長い間には自分の仕事と云ふやうな事に就ても色々と考が変つた。
「結局自分は伝道者になるやうな事になりさうだ」かう云ふ聖いやうな淋しいやうな心持になつた事もあつた。(宗教を聞く迄の私は外国貿易で大金持にならうと考へて居たのである)又私は哲学者にならうと思った事もあつた。そして仕舞に私は純文学へ行く事に決めた。(第一、二)

この引用部から分かるように、「U先生」の教えを聴くようになった後の「私」はあまりお金儲けに興味がなくなり、最終的に自分の将来の仕事として文学を選ぶに至る。このように、「U先生」の影響は「私」の人生の重大事にまで及んでいると言える。

さらに、「私」は「U先生」を「偉い思想家」と勝手に決め付けて世界的に知られた西洋の偉人たちの顔と比較し、また「欧羅巴第一の好男子」(第一、一)と同等に「U先生」を「日本第一のいい顔をした人」と断じたりしている。

友達の写したのの一つが最も断じたり通俗な意味でいい顔に撮れてゐた。
然しへートウヴェンやU先生の顔がいいと云ふ標準からは写真屋で作つた
気六ヶしさうなのが一番いい事になる。その点で私は多少考へなければならなかつた。私は迷つた。(省略) 結局私は矢張り可恐く写つた方を選ばずにはゐられなかつた。(第二、三)

「U先生」を「ベートウヴェン」と共にいい顔の基準にして自分の写真を選

んでいるように、「U先生」の影響は「私」の信仰や仕事の選択にだけでなく、自分の好みの顔立ちにまで及んでいると言えよう。

このような強い関心の対象である「U先生」に学んだ理想から、なぜ「私」が遠ざかりはじめたのかについて、次の一・二で考えてみよう。

一. 二 理想からの離反——女への欲求が持つ意味——

以前パウロの「汝等淫を避けよ」と云ふ言葉をほとんどモットオにしていた「私」にはこの時期、「姦淫罪の律」に対する違和感が見られ、それは「私」が非常に苦しむ原因となっている。次の引用から考えよう。

さう云ふ私は先生の言葉に反対して「関子と真三」と云ふ小説を其時書いた。(中略) 内容は結婚した夫婦の間にも姦淫罪はある、結婚しない相愛の男女の性交にも姦淫でない場合が幾らもあると云ふ考で、一体姦淫とは何だ、と云ふやうな事を書いたものであつた。(第一、二)

注目すべきことは波線部のような「私」の「姦淫罪」の解釈である。「関子と真三」を書いたのは、「私」がこの小説を通して「姦淫イコール罪」という決め付けに反発し異議を唱えることによって、自分の欲望を間接的に正当化するためではなかっただろうか。その後「U先生」との関係がどうなったかについて考えると、第一の三以降、キリスト教の教えにも、その教えに関する「U先生」の言葉にも何の言及もなく、「関子と真三」を境に「私」の心が「U先生」やキリスト教の教えから遠ざかり、「私」の関心は自分の欲求のみに移っていることが伺えると言えよう。

「関子と真三」を書いた後、第一の三で「殊に私の不機嫌な日」にある女性と話した後「気分は余程変わつてゐた」という描写に注意しなければならない。ここからは、「私」が例の「モットオ」から疎遠になったことが伺える。

第一の二の「私」と第一の三以降の「私」の間に見られる変化の原因是、強

まっていく「私」の女への関心と、異性との自由な関係を禁じる「U先生」から学んだキリスト教の理想との衝突にあると考えられる。すなわち、「十七の夏、（キリスト）信徒にな」り、「二十（歳）」以降キリスト教の教えに反する「女に対する要求」との間で引き裂かれる「私」に内的な葛藤が生じ、肉体から来る欲望と信仰の間で苦しむ姿が見て取れる。「私」は、十七歳頃に外から取り入れた理想とその後自身の中で生まれた女に対する欲望との間で、選択を迫られたのだということだろう。

第二節 現実の「私」——「娘」と千代の場合をめぐって——

その後、「私」は、実際に女性、すなわち最初は「混血児」の「娘」、そして、次に「女中」の千代の魅力にだんだん惹かれていく様子が描かれていく。両者はそれぞれ「十六七」と「十七八」の若い女性である。本節では、それぞれと「私」との実際の関わり方について考える。

二. 一 「娘」の場合

作中第一の四で「私」がダンスパーティーに誘われて「娘」の家を訪ねた時の場面と、第二の三の写真の場面に注意が惹かれる。

娘とはまだ挨拶をしなかつた。娘は時々私の方を見てゐた。けれども私が私の顔に表して居た表情が娘の近よる事をこばんでゐるらしかつた。(中略)／娘は時々こつちを見た。(中略)少時すると、娘は兎も角もと云ふやうに起ち上がつた。其時私は凝ッと寧ろ一層堅くなつて前からの姿勢を保つてゐた。其場合若し私が少しでもくつろいた姿勢に変れたら娘は必ず私の方へ寄つて來たに相違なかつた。娘は体で話しかけた、ところが私の体はそれに答へる自由を失つてゐた。(中略)私の意識は私の視野の最も端に置いてある娘の体にひたすら集まつてゐた。(第一、四)

其晩娘から電話がかかって來た。／「私は別に仕舞つて置いて下さるん
でせう？」／「いいえ」／「どうしてらつしやるの？」／「友達のと一緒に文庫に入れてありますよ」／「いけませんよ。ちゃんと別にしといて下さらなければ……。誰方にもお見せなすつちやあいやですよ。貴方も余り見ちやあ厭ですよ」／「承知しました」／其写真は実際に余り見なかつた。
私にはそれが其娘より何となく美しくなく見えたし、又前の年の秋見て以来、半年の間、私が頭に描いてゐた娘とは別人のやうに再び肥つて了つたからでもあつた。(第二、三)

これらの場面からは、「娘」の魅力に惹かれながらも、「娘」への対抗意識や自身の劣等感のために素直に接することができない様子が見られる。「私」が彼女に接しようとする際、素直な感情よりも、「私」自身の自己中心的な考え方へ影響されていることが分かる。にもかかわらず、第二の六において「私」は「娘」に対して〈愛情〉があることを認識している。ところが、結局自分は「貴族主義な女」とは結婚生活が送れないだろうと感じている上、「自分は自分の仕事と撞着する結婚は断然出来ないと」断じていることが注目される。以下に見てみよう。

自分は K. W. をも愛してゐるかも知れない。然しあの貴族主義な女とは徹頭徹尾結婚はできない事をよく知つてゐる。／自分は自分が其人をよく知り、又、自分を其人によく知らせないでは結婚しまいと決めてゐる。次に自分は其人を愛し、又自分が其人に愛されなければ結婚しまいと決めてゐる。最後に自分は自分の仕事と撞着する結婚は断然出来ないと決めてゐる。K. W. とは此の最後の条件でどうしても相容れない。それはよく解つてゐる。(第二、六)

どのような結婚が「仕事と撞着する」のかは明確ではないが、「私」のこの

考え方は「娘」との関係を終わらせる最も大きな要因となっていると言えそうである。

作品では二人の関係が最終的にどうなったかは明確に描かれていないが、先の第二の六の引用部から判断すると結婚に至る可能性は非常に低かったことが明確であり、おそらくその関係は消滅してしまったのではないかと考えられる。そこには「私」の自己中心的な考え方が大きく影響していることが理解されよう。つまり、「娘」との関係においては、二人の間の愛情よりも「私」自身の自己中心な考え方方が障りになったと言えよう。

二. 二 千代の場合

ここでは、「私」は「娘」から離れ、次第に身近にいる「女中」の千代に関心を持つようになっている。「不機嫌な時に千代と話をすると、それが直ぐ直る事がよくあつたのである。」（第二、六）といった描写が見られる。これは『暗夜行路』において、登喜子やお加代に关心を持つようになっていた主人公「时任謙作」が、同じ家に同居しており事実上「女中」の役を果たしているお栄^⑬に近付いていく描き方を思い出させる。謙作は「登喜子やお加代のある所へ」（『暗夜行路』第一、十一）行かなくなつた後は「お栄」に執着していく、「心から自分の孤独を感じた」（『暗夜行路』第二、五）時「急にお栄に会ひたくな」り、彼女を「感情的に、一番近い人間」（第二、五）だと感じるに至る。そうして「お栄」と結婚しようと思い、その考えは「彼の気持を明るくし」（『暗夜行路』第二、五）ている。『暗夜行路』と『大津順吉』それぞれの「女中」の間には年齢や経験の面では大きな差があるが、それぞれ「私」と「时任謙作」がそれまで付き合っていた女から離れた後、身近にいる家の「女中」に近付いて「気分」の安定を得る、という点は類似していると言えるだろう。また、『暗夜行路』の場合も『大津順吉』の場合も、それぞれ「お栄」や千代に対する主人公の気持ちが、以前付き合っていた女達に対するのと違つてより〈愛情〉を意識するものであることがはっきりと表現されている。ところで、

「孤独を感じた」時気持ちを明るくする「お栄」の場合であれ、機嫌直しに役に立っている千代の場合であれ、これらは彼女たちに対する〈愛情〉があるためだと言えるだろうか。むしろ、この〈愛情〉は、主人公の自己の心理的安定のためのものと言えるのではないだろうか。故に、その〈愛情〉はそれぞれ彼女たちに対するものだとは言い難いだろう。

さて、「私」の千代への感じ方に戻って考えてみよう。第二の八に見られる、「私」が千代に「愛してゐる」と打ち明け、結婚を申し込む場面が注意に値すると考える。

私は千代を部屋に呼んで、自分が愛してゐるといふ事を話した。(中略) 若し乃公が結婚を申し込んだら貴様は承知するか?／「……」千代は一寸驚いたやうな顔をして黙つて下を向いて了つた。／(中略) 私はいつか興奮してゐた。私は起つて用簾笥の抽斗から亡くなつた母の不細工な金の指環を出して来て、それを千代の指に穿めてやつた。そして私は首を抱いて接吻してやつた。(中略) 抱きすぐめるようにして接吻してみると、何だか千代の体が急にぐつたりと重く私にかかるつて來た。少し私が身を離すとがくりと首を前へ垂れて氣を失つたやうになつて了つた。何かいつても黙つてゐる。／其時私は驚くよりも不図、或いまはしい邪推を起こした。それは接吻以上の事をされはしまいかといふ恐れからする芝居ではないかしらといふ考であつた。(第二、八)

ここに見られるように、「私」の行動には千代の考え方や気持ちへの配慮はなく、ただ自分がやりたいようにやっていると思われる。ほとんど心の準備がなかった千代には、いきなり「私」にされたことは充分驚きに値することであり、千代の体はその突然の事態について行けないようである。「私」がついに千代の体に触れ、またそれ以上の行動に出るこれらの場面は、まるで眞の愛の場面であるかのように見えるがそうではない。実際には「私」の自己愛が露呈

している場面ではないかと考えられる。

このように、千代との関係においては、「娘」の時と違って、彼女に対して劣等感がない分、自己中心的な態度がより強く観察される。千代に対する「私」の行動には、彼女の考え方や気持ちへの配慮は見られず、「私」の自己愛が際立っていると言うべきだろう。

第三節 「私」が示す強い自我——家族や友人との関係において——

「私」と二人の女性との関わり方は本作品の主な内容であるが、他の登場人物が「私」と二人の女性との関係性にどのような影響を与えていたかについて考えることは、「私」の心理を理解するために重要であると考えられる。本節では、それら他の登場人物が「私」にどう影響を与えたかを考える。特に千代との関係が発展する中で、周囲の登場人物に「私」がどのように扱われたかを取り上げ、また、「私」が彼らをどう捉えるかを分析する。

三. 一 家族との関係の場合

「私」の心理に大きな影響を与える家族として、祖母が特に注目に値する。「私」は誰よりも祖母を信頼していたということができる描写が多く見られるにもかかわらず、この祖母が、自分のしたいことに少しでも干渉することに「私」は全く堪えられない。

私は其頃祖母に対して何となく不快でならなかつた。私に対して或警戒でもしてゐるやうなのも私の気分を苛々させた。私は其時の気分で二日も三日も此方からは一切口をきかない事などもあつた。(第二、四)

「何だ?」と祖母は如何にも穏やかな調子で云つた。／「……若しお祖母さんに少しでも僕を監督しようといふやうな気があれば、それは大変な間違ひですからネ」突然にこんな事を云ひ出した。(第二、五)

「娘」の場合における「私」の発言からは、「私」の祖母に対する鋭い反発が看取できる。そこからは、祖母に自分の自由が侵されたと「私」が認識していることが読み取れる。また、千代の場合においては、祖母の反対を理解して、「私」の異議をとなえる言葉が第二の九に見られる。

「今どうして千代に暇をやらうかと考へてゐる所だ」といつた。その云ひ方が如何にも憎々しかつた。／私は急にかッとして了つた。／若しそんなことをすれば、僕は祖母さんを捨てる許りです」私はそれから烈しく祖母を罵つた。祖母もすつかり興奮して了つた。そして烈しい劔幕で覚悟があるといつて立つて倉の方へ行つた。その倉の二階に刀簾笥といふのがあつて刀や短刀が七八本入れてある。／芝居気だとは思つた。然しそれから本当になり兼ねない位に祖母は興奮してゐると私は思つた。(中略) 私には「勝手におしなさい」とは云へなかつた。其処に母も出て来て止めた。

(第二、九)

傍線部の祖母の言動に対し「私」は直情的になり、祖母に向かって激しく感情を爆発させてしまう。ここで注目すべきなのは、祖母が興奮して「二階に刀簾笥といふのがあつて刀や短刀が七八本入れてある」倉に入った時「私」が祖母に「勝手におしなさい」とは言えなかつたことで、このような事態に至つても、「私」は祖母を本氣で「捨てる」ことはできないでいるという点である。しかしその一方で、「私」は祖母の冷静さを失つた行動を止めることもしない。「私」の関心はあくまでも自分のしたいことを貫くことになり、その邪魔をする者なら、「三つの時から」そばを離れたことのない祖母であつても、その心を思い遣すことなどほとんどないのである。そこに「私」の自我の強さを見ることができよう。

続いて、作品の最後辺りに出てくる千代が連れて行かれた直後の場面から分かるように、裏で動いた者は父であるという事実を知った後、「私」は家の者

皆に対して「堪へ難い不快と惡意とを持たずにはゐられなかつた」（第二、十二）、「腹立たしくてならなかつた」、「余りに此方を輕蔑したやり方である」（第二、十三）のように非常な怒りを感じている。それは、「私」の自尊心が決定的に傷付けられたからだと考えられる。が、このような状況において、二度と千代に会えないかも知れないという絶望や悲哀が見られないことは注目すべきだと考える。千代が連れて行かれた直後の場面では、「私」は「明日から松か君かが自分の用をするんだ」と「感傷的な気分になつ」（第二、十二）たり、「今更に千代と自分との空間的な距離を感じ」たりする。しかし、「私」から引き離された千代が、今後どのような精神的、社会的、経済的困難に直面するかなどに考えが及ぶことはない。この時点において、「私」が自分自身を何よりも大切にする態度が突出していると言えよう。

三. 二 「私」を支持する者への対応——友人を中心——

第二で現れる「重見」と「巴里にある絵かきの友達」は「私」と特に親しいと思われ、そのためか千代との関係が問題になった時期に相談相手として登場する。また、「白」という小犬も出てくるが、それは「私」と千代の間を何らかの形でつないでいるようである。「白」は第二の一において、「白といふいたづらな小犬」として紹介されており、「人が集まつたので白は一人はしゃいで、千代と私とに交るへ飛びついた」（第二、一）のような場面が見られる。その後第二の二では、以下のような描写がある。

或日、私は学校から帰つて来て直ぐ茶の間の縁側へ行かうとすると、庭の方から尾を下げて白が一生懸命に逃げて來た。立つて見てみると、倉の角から不意に千代が竹箒を丁度私がやるやうな格好に振り上げて飛び出して來た。（第二、二）

この時期に、「私」と千代の間にはあまり親密な関係はなかったが、「小犬」

を介して、傍線部に見られるように千代に単なる雇い人以上の親しみを感じていると思われる。それは、千代がわざと「私」の真似をしていたかどうかはともかくとして、千代が「私がやるやうな格好」をしていると「私」を感じていことから想像することが出来る。この引用部を「私」の千代への感情が明らかに変わっている時期の第二の七の叙述と合わせてみれば、「白」の登場はやはり意味のあるものだと言える。

三四日すると急に白が見えなくなつた。何と云ふ事もなく私には此小犬が私と千代との間で何かの役をしてゐるやうな気がしてゐたから、変な淋しい感じを私は感じた。(第二、七)

「白」の行方不明を「私」は、自分と千代の間で「何かの役をしてゐ」たものを失ったかのように思い、この時期の「私」が、何の役にも立っていないようと思われる小犬にさえ千代との絆を感じていることが伺える。

さて、友人が関わる先の場面に戻って考えよう。作中第二の十に見られる友人の「重見」の手紙の場面に注意したい。

其午後、重見から長い手紙が来た。／（中略）「もし君達のことが甘くいつたらどんなに嬉しいだらう」と思った、僕の理窟は「君が苦しめば苦しむ程為になる」と云ふが、実云ふと早く君達の笑顔が見たい。／自分は出来るだけのことがしたい、手紙を書いて君に送つたら、君の勇気を附けることが幾分か出来ると思つた、すると、早く帰りたくなつた。／「どうしたらいいいだらう」と帰りに自分は思つた、その結果次ぎの小説（?）を書くことにきめた、（中略）此手紙は強い感動を与へた。私の其時に此位適切な手紙はなかつた。私は涙ぐんだ。(第二、十)

「次ぎの小説（?）」とは「不幸なお祖母さん」という表題で、祖母を納得さ

せる意図で書かれたものである。この書き物は祖母が「私」とどれほど親密な関係であったかを両者に思い出させ、「『ウン』と一つ承知」(第二、十)してくれるように祖母を説得しようとしている。それと同時に、「私」が祖母に対して言った「『見捨てます』」(第二、十)というような激しい言葉の背景にある「私」の心への理解を祖母に期待し、「私」が「約束した今その女人をすて」ることはできないと「私」の立場を弁護しているようである。このように、「重見」は祖母を納得させようとすると同時に「私」をも励まそうとしていると思われる。

一方「私」は、「重見」以外に「巴里にゐる絵かきの友達」にも現在の問題を打ち明けている。その友達が直接に登場することはないが、「私」が彼に手紙を書く場面が二回出てくる。

翌朝、私は現在の事について巴里にゐる友人へ手紙を書いた。手紙の紙に三枚ばかり書き進んだ時に、(中略) ペンを描いて、(後略) (第二、十)

暫くして私は巴里にゐる絵かきの友達への手紙の続きを書き始めた。／「今は夜の一時だ。／僕は今晚程の怒りを嘗て経験した事がない。今、僕は独り如何にも愚かな乱れ方をした所だ、乱れまいと努力するのが面倒臭いからだ。今晚は迫も眠れない。(中略) 私は興奮から切れべな文章で書いた。／「……これでも僕は怒つては悪いか?」こんな句が所々にある。／レターペーパーの裏表に九枚書いた。仕舞に、／「父は僕を廃嫡するとも此事は許さぬと云ふさうだ。／祖母は廃嫡は家のカキンである。これに比すれば地位の違つた女でも入れる方がよいと云ふさうだ。／(中略) 兎に角、僕はこんな人達とは共に暮らせない。／(中略) 僕には君と重見と千代とがある。実を云ふと、もう一人、祖母があると加へたいのだ。」(第二、十三)

以上の手紙は千代が大津家から出されたことが分かった直後の場面に登場する。その場面とは「私」がその裏で動いた者が誰であるか知つて非常に怒っている時のことである。このような際に友達に手紙で自分の困難な状況を知らせることは、その人に対する「私」の親密の度合いを表していると言える。その一方、傍線部のように「私」は自分の味方を数え、祖母をもその数に入れることが出来たならと考えている。自分のすることに賛同して欲しく、祖母を頼りたいという気持ちがまだあるのだろう。ここに注目すべきと思われるのは、「私」のこの気持ちは重見の「小説（？）」めいた手紙を読んでからのものであるので、「私は涙ぐ」むほど「強い感動を与へ」られたことの影響と無関係ではないだろうということである。そもそも幼児の頃から長く祖母のそばに生活をし、その情愛を一身に受けてきた「私」は祖母の反対を本当に理解することができず、むしろ祖母は自分を理解してくれるはずだという思い込みがあると思われる。

「私」は、自分の行動を支持する友人に対しては、自身への応援を働きかけるなど積極的な態度を示す。その一方、自分を激しく批判する祖母には、それまで信頼を寄せ、親愛の情をしばしば表していたにもかかわらず、「祖母さんを捨てる許りです」と言うほどに、強い拒絶の姿勢をとる。このように他の登場人物との関係からも、「私」の自己中心的なものの見方が浮かび上がる。

おわりに

本稿では、二人の女性と「私」との関わり方により変貌する「私」の心理を分析し、「私」のキリスト教の理想への接近とそこから遠ざかる過程について考え、その後の現実の「私」について検討してみた。また、「娘」と千代それぞれと「私」との実際の関わり方について考えた。

信仰から離れ欲望に従わざるを得なくなっていく様子、「娘」に対する「私」の対抗意識、千代に対して「私」の劣等感がない分よけいに現れてきた自己中心的な行動、そして祖母に対する「私」の反発の仕方などからは、自己に対する「私」の並みはずれた執着を読み取ることができる。なお、このよう

な「私」の描出を可能にしたこの作品の語り手である現在の「私」にも同時に注意を払う必要があると思われ、それを今後の課題としたい。

〔表〕『大津順吉』における時間の流れ

作品世界の時間の流れは非常に分かりにくく感じられるが、主人公の心理的な変化を理解するためには、場面の前後関係を把握しなければならないと考える。山口氏は、既にその論文において「『大津順吉』における時間の推移」と題する表を作っている。本稿においては山口氏に倣いつつ、論者の理解による作品時間の流れをあらわす表を改めて作ってみた。なお、氏の理解と若干異なる部分があり、その点については脚注において詳しく述べている。

章、節	作中記述される日時の表現	推察される年月日	補足説明
第一、一	「其頃」「或日」	不明（明治 33 か 32 年（?））	過去（明治 38 年 - 5、6 年 = 明治 33 か 32 年 ?）
二	「或るクリスマスの晩」「或時」	不明（明治 38 年（?）12 月 25 日） 明治 39 年（?）	過去、「一」より 5、6 年間の隔たりがある。
三	「或日」「四五年前」 （「四五年前」の後）「一年か一年半程して」	明治 39 年？月？日 (秋つまり 9 月から 11 月の間) 明治 34 か 35 年（?） 明治 36 か 37 年（?）	第一の二の最後の時点から「或日」の現時点の間の時間的な隔たりについて考えれば、「或日」の時点で「私」の年齢は二十二歳（本稿一・二の最後あたりにおいて詳しく述べている）だったはずであり、「閑子と真三」を書いた時期の年齢は、第一の一の「十七の夏」の入信から第一の二では既に「五六」以上経っているという描写があるので、二十二、三歳の可能性が高い。このように、両時点の間にはそれほど時間的な隔たりがないと推測されよう。

章、節	作中記述される日時の表現	推察される年月日	補足説明
四	「水曜日と云ふ日が来た」「七時半になつた」「十二時を少し過ぎてゐた」	明治39年?月?日 +三節の2、3日	三節の2、3日後 ^⑭ 第二の三の「前の年の秋見て以来、半年の間、私が頭に描いてゐた娘とは別人のやうに再び肥つて了つた」を確認してみると、第一の四の「十六七の背のスラリとした細面の美しい娘…」は半年前の娘だと言える。故に、第一の三の「或日」は明治39年の秋になるだろう。
五	「翌朝」「午後」	明治39年?月?日 +四節の1日	四節の翌日
六	「其晩」	同日	五節の同日の晩
七	「十日程すると」	明治39年?月?日 +四節の1日 + 10日	六節の十日間以後つまり、第一の三の「或日」から十三、四日間の隔たりがあると言えよう。
「前の年の秋」「から半年」（第二、三）と、第一の四の「水曜日と云ふ日」を合わせて考えれば、一と二の間には約半年の隔たりがあると言えよう。また、第一の四で外套を着ており、第二の一で「春の末から」とあることからもそう考えられる。			
第二、一	「或午後」	明治40年?月?日	冒頭の「春の末から初夏へかけて私は毎年少しづつ頭を悪くする（中略）／或午後私は独りさういふ心持で」から考えると、この日は、「春の末から初夏」になり、作品の最後に書かれている日付を考え合わせてみると、この日は明治40年の「春の末から初夏」である。つまり、明治40年の6月頃だと推測されよう。
二	「或日」	明治40年?月?日	
三	「夜になって」「翌日」「其翌日」	明治40年?月?日 明治40年?月?日 + 夜から1日目 明治40年?月?日 + 三の夜から2日目	二の同日 二の翌日 二の翌々日

章、節	作中記述される日時の表現	推察される年月日	補足説明
四	「或午後」	明治 40 年 ? 月 ? 日	明治 40 年の夏だと推測される。
五		明治 40 年 ? 月 ? 日と同日	四節と同日
六	「七月十一日」「七月十五日」「廿日」	明治 40 年 7 月 11 日 明治 40 年 7 月 15 日 明治 40 年 7 月 20 日	二、三、四、五の各節は明治 40 年 6 月から 7 月 11 日の間の時期だと推測できる。
七	「或午後」「三四日すると」「二三日すると」	明治 40 年 7 月 ? 日 「或午後」 + 3、4 日 「或午後」 + 3、4 日 + 2、3 日	七の「或午後」を第二の六の 7 月 20 日と第二の八の「八月に入って」から考えると「或午後」とは、7 月 20 日から 8 月に入るまでの日を指す。第二の 7 にはだいたい一週間の期間があるため、ここの「或午後」とは 7 月の 21 から 24 日の間の日を指すと推測できるだろう。
八	「八月に入って」「八月廿日に帰つてきた。」「箱根から帰つた翌々晩」	明治 40 年 8 月 ? 日 明治 40 年 8 月 20 日 明治 40 年 8 月 22 日	六と八の間は十日間以上の隔たりと言えよう。
九	「翌朝」「翌日の朝」「翌朝」「其晩」「翌朝」「翌日の朝早く」	明治 40 年 8 月 23 日 明治 40 年 8 月 24 日 明治 40 年 8 月 25 日 同日 明治 40 年 8 月 26 日 明治 40 年 8 月 27 日	
十	「翌朝」「翌朝」「其午後」	明治 40 年 8 月 28 日 明治 40 年 8 月 29 日 同日	
十一	「夜八時頃になつて」	同日	明治 40 年 8 月 29 日
十二	「十二時頃だつた」	明治 40 年 8 月 30 日	
十三	「もう一時近かつた」「明治四十年八月卅日午前三時半」	同日	明治 40 年 8 月 30 日

[注]

- ①例、「或日—其日は殊に私の不機嫌な日だつた。」(第一、三)、「然るに——余談になるが——私は大学では(後略)」(第一、四)、「私に幼年時代—其頃はいつも抱かれて寝てゐた—を突然に(後略)」等や「(宗教を聴く迄の私は外国貿易で大金持ちにならうと考へて居たのである)」(第一、二)、「(其後二年程して畳がへの時見たらかなり厚い根太板が真ん中から折れてゐた。其時も私は其晩の事を考へて独り笑はずにはゐられなかつた。)」(第二、十三)など。
- ②詳細は「〔表〕『大津順吉』における時間の流れ」を参照されたい。
- ③中村光夫『志賀直哉論 筑摩業書50』「内村鑑三」(筑摩書房 昭和41年)(初出:中村光夫「志賀直哉論——『濁つた頭』と『大津順吉』」(『文学界』第七卷四号、昭和28年4月))
- ④須藤松雄『志賀直哉の文学 近代の文学7』(南雲堂桜楓社 昭和38年)
- ⑤池内輝雄『『大津順吉』論——志賀直哉の創作意識について——』(『大妻国文』第一号 大妻女子大学国文学会 昭和45年3月)〔後、池内輝雄『志賀直哉の領域』(有精堂 平成2年)に「『大津順吉』論」として収録〕
- ⑥同書
- ⑦上田穂積『志賀直哉「大津順吉」考——「第一」の意味』(『徳島文理大学研究紀要』第六七号 平成16年3月)
- ⑧須藤松雄氏のほか、国松昭『『大津順吉』論』、池内輝雄『『大津順吉』論——志賀直哉の創作意識について——』、山口直孝『志賀直哉「大津順吉」論——「わがこと」を語る小説をめぐる試行』、上田穂積『母への憧憬——志賀直哉の第二創作集『大津順吉』を読む』、細江光「名作鑑賞『大津順吉』——再評価のために』などの論文がある。
- ⑨例、池内輝雄『『大津順吉』論——志賀直哉の創作意識について——』、国松昭『『大津順吉』論』(氏は「『大津順吉』そのものに絞った『大津順吉論』は意外に少ないのである」と述べているにもかかわらず、自論においても志賀の実生活と重ね合わせて作品を考えている)、亀井千明「メディアの中で生成される〈私〉——志賀直哉『大津順吉』に見る自己語りの様相」(『阪神近代文学研究』平成16年3月)、上田穂積『志賀直哉「大津順吉」考——「第一」の意味』(氏は「『大津順吉』を読むためには、一度、志賀直哉=大津順吉という図式を再考してみる必要があるのだ。」としているが、実際には志賀の実体験と重ねて読んでいる箇所が多い)などを挙げることができよう。
- ⑩細江光「名作鑑賞『大津順吉』——再評価のために」(『甲南国文』平成19年3月)(本論文は、細江光著『作品より長い作品論:名作鑑賞の試み』(和泉書院 平成21年)に収録された。)
- ⑪ほかに、大西貢『『大津順吉』における虚と実』(『愛媛大学文理学部国語国文研究会』第二三号 昭和62年9月)においても事実と虚構の比較が見られる。
- ⑫国松昭『『大津順吉』論』(『東京外国语大学論集』第二五号 東京外国语大学 昭和50年3月)
- ⑬お栄は千代と違って本来「女中」ではなく、昔主人公の祖父の妾だった女で、当時「女中」の役割も果たしていた。
- ⑭山口直孝氏は「志賀直哉『大津順吉』論——「わがこと」を語る小説をめぐる試行——」(『二松学舎大学論集』第四四卷二〇〇一年三月)〔後、山口直孝『私』を語る小説の誕生:近松秋江・志賀直哉の出発期に「『大津順吉』論——小説家「自分」の変容」として収録。〕においては、「三の5・6日後」と述べているが、「娘」の母の「五六日前不図、久しう振りでダンスでもやつて見ようと云ふもんですからネ、(中略) 今晚皆さんに御いでを願つたんです」(第一、四)から考えれば、第一の三に見られるダンスの件で「私」に来た電話は「水曜日」から「五六日」以内のことだと言えるが、第一の四の「二三日前自分の部屋で見た雑誌の口絵とは殆ど同一人」と、その電話で話した後の「私は不意に身を起こすと、本箱の抽斗から一冊の女の雑誌を出して來た。／其口絵に(中略) 活人画の写真が出てゐた」とを合わせて考えれば、第一の三の「或日」と「水曜日と云ふ日」

の間には明らかに二、三日の隔たりがあると言えよう。

付記：志賀直哉作品の引用は『志賀直哉全集』（岩波書店一九九八～二〇〇二年に拠る。傍線は総て論者の付したものである。改行部分は「／」で示した。また、旧字は適宜新字に改め、ルビは省略した。）

* 討議要旨

モハンマド・イムラン氏より、主人公の「私」を強調するという点に自己認識の危機（Identity crisis）があったと読み取れるが、それについてどう考えるかとの質問があった。発表者は、この作品は私小説であり、その中で主人公「自分」について書かれているので、自己認識の危機（Identity crisis）があるとはいえないのではないかとの見解を示した。続いて司会者より、スライド資料の中で示された、自分と重見と千代と、そこにできれば祖母も仲間に加えたいといった表現も、発表の中心テーマである「自己中心的」な考え方というところに収束していくのかとの質問があった。発表者は、この部分だけではなく、全体的な登場人物関係の把握において、重見との関係を重視して考えていくつもりであると回答した。これに対して司会者は、自己中心的な心理構造が揺らぐことなく一篇を貫いていると理解してよいのか、そうではなく様々な人との関わりや繋がりから、主人公の自己中心的な心理構造に、ゆらぎや変化や成長、あるいは変質といったものが見られるとは考えられないか、と質問した。発表者は、問題意識の部分で示した通り、他の登場人物、例えば『大津順吉』の「第一」で出てくる「U先生」との関係、あるいは「混血児」の「娘」との関係においても、主人公の自己中心的な考え方方が認められ、それ以外の登場人物との関係に関しても自己中心的な考え方方が示されている点に注目しており、変質するとは考えないと回答した。最後に柳井宏夫氏より、志賀直哉の作品における女性の一貫性、共通性は、何らかの問題意識として見てこないのか、例えば、この作品において異性として見た「絹」と「千代」に着目し、分析を進めることは可能ではないかとの質問があった。発表者は、志賀直哉の作品全体の評価として現段階で述べることはできないが、他の作品、例えば『濁った頭』においても、そうしたとらえ方は可能であると考えていると回答した。